



非和語系語彙の連体修飾用法に対する一考察 : 異なる連体修飾標識の許容度に注目した計量調査

鄧, 琪

(Citation)

統計数理研究所共同研究リポート, 444:123-138

(Issue Date)

2021-03-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012578>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012578>



非和語系語彙の連体修飾用法に対する一考察

—異なる連体修飾標識の許容度に注目した計量調査—

鄧 琪

神戸大学 (大学院生)

概要

本研究は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いて、非和語系語彙に後続する「ナ」・「ノ」・「シタ」・「的 ϕ 」・「的ナ」という 5 つの連体修飾標識の許容度がどのように異なるかを調査した。その結果、RQ1 (漢語における 5 種の連体修飾標識の許容度) では、(1) 5 標識の相違について、結合しうる漢語の種類数においても頻度占有比においても「ノ」が最も典型的な連体修飾標識であること、(2) 語彙の相違について、漢語は平均して 3 程度の標識を許容し、また、ほとんどの漢語はある 1 つの連体修飾標識を選好する傾向があること、が確認された。次に、RQ2 (外来語における 5 種の連体修飾標識の許容度) では、(1) 5 標識の相違について、漢語と同じように、結合しうる種類数においても頻度占有比においても「ノ」が最も典型的な連体修飾標識であること、(2) 語彙の相違について、半分以上の外来語は 1 つの標識としか結合できなく、また、各連体修飾パターンの頻度に基づいて分類すると、ほとんどの外来語は「ノ」型であること、が確認された。

キーワード

非和語系語彙, 連体修飾標識, 許容度

1. はじめに

日本語の語彙は、その言語的出自によって、日本語の固有語彙である和語と、外国語の語彙 (の一部) を取り込んだ非和語系語彙の 2 種に分類される (なお、広義の非和語系語彙のうち、混種語の一部分は和語がその構成成分となっていることから、本研究では混種語は調査の対象から外し、漢語と外来語の 2 種を持って非和語系語彙と呼ぶことにする)。近年の調査の結果、日本語の語彙においては非和語系語彙が大きな割合を占めることが明らかにされている。たとえば、2011 年に公開された『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (以下、BCCWJ) によれば、非和語系語彙の比率は語種の 67% である。このように、非和語系語彙

は日本語語彙の重要な一部分をなすものであると言える。

なお、非和語系語彙は単独で使用するのみならず、他の名詞と結合して新たな名詞句を作ること考えられる。その場合、想定される結語パターンとしては大別して以下の 5 種類が挙げられる。以下では、X が議論の対象となる非和語系語彙、Y は結合相手の名詞を示す。

- (1) X ナ Y
- (2) X ノ Y
- (3) X シタ Y
- (4) X 的 Y
- (5) X 的ナ Y

ここで注目すべきは、漢語か外来語かによって、さらには個々の語によって上記の 5 形式のうち、使用できるものと使用できないものがあるように思えることである。下記は、漢語として「独自」と「選択」、外来語として「マクロ」と「オープン」を例に取り上げて簡易検証用の名詞句を作り、母語話者（大学の先生 1 人）に言えるかどうかを「○」「△」「×」の 3 段階で内省判断してもらった結果である。また、使用した語は形容詞的なものと動詞的なものをそれぞれ含むようにしている。

表 1

母語話者の内省判断

	X ナ Y	X ノ Y	X シタ Y	X 的 Y	X 的ナ Y
独自	独自な手法○	独自の手法○	独自した手法×	独自の手法○	独自のな手法△
選択	選択な結果×	選択の結果○	選択した結果○	選択的结果×	選択的な結果×
				(言えるが意味が変わる)	
マクロ	マクロなレベル○	マクロのレベル○	マクロしたレベル×	マクロ的レベル○	マクロ的なレベル△
オープン	オープンな店×	オープンの店×	オープンした店○	オープンの店×	オープンのな店×

注:「オープン」についての判断は「開店」という意味で使われる場合のものである

上記をふまえると、5 つの名詞句形式の許容度は漢語と外来語によって、また、個々の語によって大きく異なると言えそうである。これらの点をふまえ、本研究では、非和語系語彙が「ナ」「ノ」「シタ」「的の」「的ナ」という 5 つの連体修飾標識に対する許容度がどのように異なるかの説明を目指す。

2. 先行研究

従来、異なる連体修飾標識の比較について様々な研究が行われてきた。たとえば、「ナ」

と「ノ」の比較について、田野村 (2002) や荻野 (2006)、羅 (2009)、李 (2013)、そして鄧 (2019) などが挙げられる。また、「ナ」と「的ナ」の比較について、豊田 (1980) と王 (2008) が、「的φ」と「的ナ」の比較について、呉人 (2008) と原田 (2016) が挙げられる。以下、それぞれの研究において得られた主な知見を表にまとめる (なお、非和語系語彙の体言接続問題に関わる先行研究の中、漢語を取り出して考察を行った研究は存在するが、外来語を単独に取り出して考察した研究は筆者の知る限り少ないため、ここでは漢語と外来語を分けず同時に見ることにする)。

表 2

異なる連体修飾標識の比較に関わる先行研究

	先行研究	標識	意味特徴
「ナ」と「ノ」の比較	田野村 (2002)	「ナ」	程度の大小を問題とすることのできる属性を表す
	荻野 (2006)	「ノ」	そうであるかないかと言えない択一的な属性を表す
	羅 (2009)	「ナ」	①「柔らかい」語感あるいは「情意的」イメージを表す ②その事実に対する強調や好悪の話者の心情を表す
		「ノ」	①「固い」語感あるいは「客観的」イメージを表す ②事実をニュートラルで述べる
	李 (2013)	「ナ」	「活動 (出来事) 概念」を表す
		「ノ」	「関係概念」を表す
	鄧 (2019)	「ナ」	①程度の大小を問題とすることのできる属性を表す ②修飾語は外来語である場合、外来語の元となる原語が動詞性を持ち、または抽象的關係を含意する時「ナ」が選択しやすい
		「ノ」	①そうであるかないかと言えない択一的な属性を表す ②修飾語は外来語である場合、その元となる原語が名詞性を持つとき「ノ」が選択しやすい
「ナ」と「的ナ」の比較	豊田 (1989)	「ナ」	「直接あるものの状態・性質などを形容している」という意味を有する
		「的ナ」	「…の性質・状態のような、…まがいの、…もどきの、…に類する」というような意味を表す
	王 (2008)	「ナ」	①より日常語的である ②語基は「感覚」「性格」「状態」「数量」などの意味分野に属する
		「的ナ」	①文章語的な公的なイメージを高める働きがある ②語基は「変化」「関係」「支配」「感覚」の意味分野に属する
「的φ」と「的ナ」の比較	呉人他 (2008)	「的φ」	「的」の派生語と被修飾語の結び付きが強い
		「的ナ」	①被修飾語が形式体言である ②被修飾語が一字の漢語である ③「的」の派生語の後にさらに限定語がある
	原田 (2016)	「的φ」	①臨時一語化すると思われた場合や文脈上の漢語連続とのバランスを保つ②意味的にはやや制限がかかる
		「的ナ」	構文的な理由や臨時一語として認めにくいと感じられる

従来の研究は様々な知見を示したが、以下のような課題も残されている。

1 点目は、5 種の連体修飾標識のうち、「シタ」の分析事例が存在しないということである。上述のように、「ナ」・「ノ」・「的 ϕ 」・「的ナ」の特性については詳しく調査がなされてきたが、「シタ」というサ変動詞の連体用法に対する調査はほとんどない。動詞に由来する「シタ」は、その他の標識とは統語的性質が異なるが、名詞を修飾する点においては他の連体修飾標識と同等の機能を持つ。ゆえに、本研究では「シタ」を調査対象に含める。

2 点目は、少数の標識を取り上げた研究は多いが、5 つの標識を同時に比較した研究はほとんどないことである。特に、非和語系語彙に対して 5 つの標識の許容度がどのようなになっているのかについて調査した研究はほとんどない。本研究では、この点をふまえ、5 つの連体修飾標識を網羅的に比較する。

3. 研究設問・研究手法

3.1 研究設問

すでに述べたように、本研究は非和語系語彙に後続する「ナ」・「ノ」・「シタ」・「的 ϕ 」・「的ナ」という 5 つの連体修飾標識の許容度がどのように異なるかを調査する。また、調査対象となる非和語系語彙について、本研究は重要漢語と重要外来語のそれぞれの上位 100 語をサンプルとして調査を行っていく。

上記をふまえ、本研究は以下の 2 つの RQ を設定した。

RQ1 重要漢語上位 100 語をサンプルとした場合、5 標識の許容度にどのような違いがあるか？また、個々の語によってどのような差異があるか？

RQ2 重要外来語上位 100 語をサンプルとした場合、5 標識の許容度にどのような違いがあるか？また、個々の語によってどのような差異があるか？

3.2 調査対象語の抽出

上述のように、本研究は重要漢語と重要外来語のそれぞれの上位 100 語を調査対象語とする。ただし、重要漢語や外来語の選定については、従来幅広く行われてきたが、既存の国語辞典における収録状況を調べることや研究者の主観判断を調べるといった間接的データに基づくもの（国立国語研究所，1984 など）と、実際の言語使用を収集したコーパスのような直接的データに基づく語彙抽出（李，2011 など）、そして、上記の両者を組み合わせたもの（井上，2004，郭，2012 など）などに分けられる。本研究は、言語の典型性に注目するというコーパス言語学の観点から、言語の使用実態がより客観的に反映されているコーパスに基づく語彙抽出を行うこととする。ただし、コーパスデータを直接的証拠として漢語および外来語の重要語を抽出していく際に留意すべきは、コーパスのジャンルに適切な配慮を行うということである。そこで、本研究においては頻度とレンジ（使用範囲）という 2 つ

の基準を立てて、重要語彙の抽出を行うこととする。

はじめに、重要漢語の抽出については、まず、BCCWJ におけるすべての 2 文字漢語を抽出する。なお、2 文字漢語に限定した理由は、(1) 2 字漢語が日本語の漢語語彙の種類や頻度において中心的な位置を占めており、(2) 3 字以上の漢語のほとんどは、2 字漢語が語基になって成り立っており、(3) 1 字漢語は、和語の複合要素（動詞や助詞・助動詞）との結合が固く、他の 2 字以上の漢語と文法的振る舞いが大きく異なっているためである（間淵，2017）。次に、それらの漢語に対して各言語変種における頻度と、各言語変種における語の順位を調べる。最後に、各漢語の重要度として「重要度＝コーパスにおける出現頻度（ここでは、PMW（100 万語あたり調整頻度）を使用する）×（1/言語変種順位平均値）」という式で計算し、その値に基づき順位付けを行い、上位 100 語を抽出する。

なお、本研究は BCCWJ における 13 言語変種のうち、韻文を除くこととする。また、書籍については、「出版・書籍」と「図書館・書籍」、「特定目的・ベストセラー」を合わせて 1 つの言語変種と見なす。最後に、話し言葉における非和語系語彙の出現を確認するため、『日本語日常会話コーパス』（以下、CEJC）も言語変種の 1 つとして見なす。すなわち、本研究で対象となるのは、書籍、雑誌、新聞、白書、教科書、広報紙、Yahoo!知恵袋、Yahoo!ブログ、法律、国会会議録、話し言葉（CEJC）という 11 種の言語変種である。

たとえば、「自分」という漢語を例に説明しよう。まず、BCCWJ における出現頻度は 1061.81 である。次に、各言語変種における「自分」の順位について、書籍ジャンルにおける順位は 2 位、雑誌ジャンルにおける頻度は 4 位、新聞ジャンルにおける順位は 19 位、白書ジャンルにおける順位は 992 位、教科書ジャンルにおける順位は 16 位、広報紙ジャンルにおける順位は 151 位、Yahoo!知恵袋における順位は 2 位、Yahoo!ブログにおける順位は 3 位、法律ジャンルにおける順位は 3556 位、国会会議録ジャンルにおける順位は 189 位、話し言葉における順位は 6 位となり、これらの平均順位は 449.09 位となった。最後に、重要度＝コーパスにおける出現頻度×（1/言語変種順位平均値）という式で計算した結果、 $1061.81 \times (1/449.09) = 2.36$ という値が得られる。また、「必要」という漢語は BCCWJ における頻度は 674.93 であり、各言語変種における平均順位は 22.09 であるため、重要度は 30.55 となった。つまり、平均頻度においては、「自分」のほうが上位になるが、最終的な重要度においては、「必要」のほうが上位になる。

それから、重要外来語の抽出についても、漢語と同じような手順で各外来語の重要度を計算し、順位付けを行い、上位 100 語を抽出する。以下、重要漢語と重要外来語のそれぞれの上位 10 語を例として示す。

表 3

重要漢語と重要外来語の上位 10 語

順位	漢語	PMW	ジャンル 順位平均	重要度	外来語	PMW	ジャンル 順位平均	重要度
1	必要	674.93	22.09	30.55	テレビ	149.54	23.55	6.35
2	関係	550.57	44.09	12.49	サービス	159.03	28.55	5.57
3	以上	446.17	47.27	9.44	センター	197.53	38.18	5.17
4	社会	468.19	77.27	6.06	ホーム	103.14	29.82	3.46
5	情報	376.49	64.00	5.88	スポーツ	85.65	32.45	2.64
6	問題	683.27	125.91	5.43	データ	126.28	59.36	2.13
7	生活	403.06	81.18	4.96	グループ	95.59	48.55	1.97
8	地域	379.04	80.55	4.71	システム	157.32	81.09	1.94
9	学校	364.35	83.18	4.38	メール	149.02	87.27	1.71
10	利用	337.95	77.82	4.34	バス	80.67	50.64	1.59

本研究は上記の方法によって抽出された重要語彙に対して調査を行うこととする。

3.3 研究手法

RQ1 と RQ2 では、3.2 節で抽出した重要漢語と重要外来語の上位 100 語に対して、5 種の連体修飾標識と結合する各連体修飾パターンは BCCWJ における出現状況を調査する。ここでは、ジャンル区分は行わず、総体データに対して出現状況の調査を行う。また、分析は以下の手順で行う。はじめに、5 種の標識の側に着目し、(1) 標識ごとに結合しうる漢語（外来語）の数と、(2) 各標識の頻度占有比を調べる。続いて、漢語（外来語）の側に着目し、(3) 漢語（外来語）別の標識結合状況、(4) 結合可能な標識種別数ごとの漢語（外来語）一覧、(5) 標識に対する選好性に基づいた漢語（外来語）のタイプ分けについて順に概観する。なお、データ処理にあたって留意すべき点が以下の 2 つある。1 点目は、いわゆる臨時一語（当該の文脈でのみ 1 回限りで許される臨時的な造語）の扱いである。本研究においては、個々の形式の出現の有無を判断する場合、頻度 1 のものは除外し、頻度 2 以上のものに限ることとする。2 点目は、以下に示すように、前接要素を含む漢語（外来語）の出現例の扱いである。

(6) 清朝がたおれ、新政権にかわったといっても、広大な中国で、交通や通信の方法がそれほど発達していなかった時代なので、とくに辺境は一時的に不安定な状態になったのはやむをえない。(LBn9_00218)

(7) 人員削減の主要な対象として、より低コストのパート労働者に代替されつつある。(LBe3_00074)

- (8) イラクにおける大量破壊兵器の能力は九十～九十五パーセントまで、検証可能な形で廃棄されました。(PB33_00294)
- (9) フリータイムのママの妹だとわかったことで、彼女に対する印象が大きく変わったのだ。(LBi9_00016)

例 (6) と例 (7) では、キーとなる漢語 (外来語) の直前に接頭詞があり、例 (8) と例 (9) では、直前に名詞がある。これらの事例の許容度は、こうした前接要素によって影響されている。そこで、本研究では、キーとなる漢語 (外来語) の直前に接頭詞と名詞が来る用例については、出現数から除外することとする。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 漢語における 5 種の連体修飾標識の許容度

はじめに、5 標識の許容度について、(1) 出現の有無 (前述のように、本研究では、臨時一語の可能性をふまえ、2 回以上の出現のみを「出現」例とみなす) に基づく観察と、(2) 頻度に基づく観察の 2 種を行っていく。

まず、前者に関して、漢語 100 種のうち、5 種の連体修飾標識ごとに結合しうる漢語の種類数を計測した。その結果、以下の図 1 が得られた。

図 1

連体修飾標識ごとに接続できる漢語の種類数

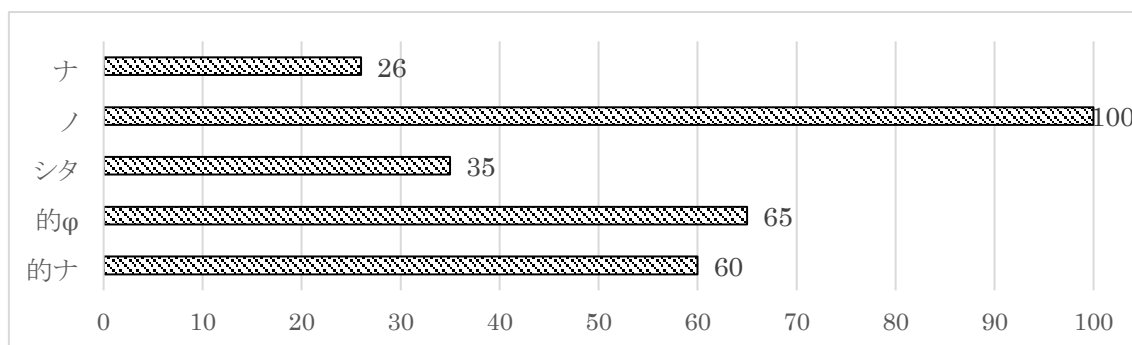


図 1 を見ると、5 つの標識のうち、「ノ」の許容度が一番高く、続いて、「的φ」>「的ナ」>「シタ」>「ナ」という順序関係となるということである。特に「ノ」は 100 語の漢語のうち、すべての漢語とも接続でき、許容度の最も高い連体修飾標識と言えるであろう。また、個々の連体修飾標識と結合しうる漢語の種類数には大きな差が存在することも確認された。

続いて、同じく重要漢語上位 100 語に対して、5 標識の出現頻度を計算し、総頻度を 100 として、各標識の占有比を求めたところ、以下の結果を得た。

表 4

漢語と結合する場合の 5 種の連体修飾標識の占有比

標識	ナ	ノ	シタ	的 ϕ	的ナ
占有比 (平均)	6.74%	72.74%	8.61%	4.85%	7.05%

上表から、5 種の標識の占有比については、「ノ」>「シタ」>「的ナ」>「ナ」>「的 ϕ」という順序になることが確認された。ここでは、以下の 5 点に絞って考察する。

まず、1 点目は、5 種の標識の使用度に大きな差が存在するという点である。一般に、「5 種の標識が存在する」と言う場合、それらが等しく使用できると思いがちである。しかし、大規模なコーパス調査の結果、漢語に後続する個々の連体修飾標識の許容度には大きな差が存在することが確認された。

2 点目は、5 種の中で「ノ」が全体の 7 割を占め、圧倒的に多いということである。漢語と他の名詞の結合においては、「ノ」が典型的な標準形であることが示された。また、形態的に類似している「ナ」と「ノ」の間にも大きな差があることがあわせて確認された。

3 点目は、多くの先行研究で調査対象外とされていた「シタ」が、「ノ」に次いで多く使用されるということである。文法的な性質という点では他と違いが存在するが、漢語と名詞の結合という表現形式においては「シタ」も重要な位置を占めていることが示唆された。前述のように、「シタ」が接続できる漢語の数は 100 語のうち 35 語しか存在しておらず、「的ナ」の 58.33%しか占めていないが、平均使用率で並べると 2 位となり、「的ナ」より 1.56%も多いことが明らかになった。この点についていえば、「シタ」と接続できる語の数は必ずしも多くないが、その使用頻度が高い。

4 点目は、同じく「的」を含む「的 ϕ」と「的ナ」では、「的ナ」のほうが多く使用されるということである。すなわち、実際の日本語では、「的」だけでなく、さらに「ナ」を加えることがより自然であることが示された。なお、ここで注目すべきは、接続できる漢語数が 2 位となる「的 ϕ」は、5 種の連体修飾標識の平均使用率が最も低くなることである。すなわち、「シタ」とは逆に、「的 ϕ」と接続できる漢語は多いが、その使用頻度が低い。この点について、原田 (2016) では臨時一語化すると思われた場合や文脈上の漢語連続とのバランスを保つ場合「的 ϕ」を使用すると述べられたが、今回の結果から見れば、原田 (2016) の結果と合致していると言えるであろう。

最後に、5 点目は、「ノ」を除くと、「シタ」を含む残りの 4 形の頻度が拮抗していたということである。このことは、後続する連体修飾標識による意味機能の比較分析の必要性を示唆していると言える。

以上で、出現の有無と頻度という 2 つの観点から、漢語上位 100 語全体の傾向を確認してきた。しかし、上位語とはいえ、個々の語ごとに差が存在する可能性もある。そこで、個別に調査したところ、以下の結果を得た（ここでは上位 10 語を例として示す）。

表 5

漢語上位 10 語の 5 標識の占有比および 5 標識に対する許容度

	漢語	ナ		ノ		シタ		的φ		的ナ		許容度
1	必要	98.95%	○	0.79%	○	0.00%	×	0.26%	○	0.01%	×	3
2	関係	0.17%	×	88.74%	○	10.43%	○	0.17%	○	0.50%	○	4
3	以上	0.06%	○	99.83%	○	0.12%	○	0.00%	×	0.00%	×	3
4	社会	0.03%	○	40.31%	○	0.00%	×	48.52%	○	11.14%	○	4
5	情報	0.14%	○	99.50%	○	0.00%	×	0.23%	○	0.14%	○	4
6	問題	0.99%	○	98.96%	○	0.00%	×	0.05%	×	0.00%	×	2
7	生活	0.00%	×	98.59%	○	1.07%	○	0.12%	○	0.21%	○	4
8	地域	0.00%	×	93.82%	○	0.00%	×	3.62%	○	2.55%	○	3
9	学校	0.00%	×	99.70%	○	0.00%	×	0.20%	○	0.10%	○	3
10	利用	0.00%	×	34.40%	○	65.55%	○	0.00%	×	0.05%	×	2

上記に明らかなように、個々の語の単位で見ると、結合可能な標識の数はまちまちである。これらを整理したところ、以下の結果が得られた。

表 6

個々の漢語と接続できる標識の数

標識数	語数	漢語
5	1	意味
4	26	関係、社会、情報、生活、研究、活動、基本、可能、状況、世界、計画、管理、自然、教育、人間、説明、健康、中心、機能、指導、存在、消費、決定、発生、生産、代表
3	40	結果、目的、確認、必要、内容、一般、方法、部分、参加、時代、開発、対象、文化、制度、女性、効果、以上、地域、学校、環境、企業、経済、調査、現在、技術、地方、状態、個人、国際、対応、評価、国民、商品、期間、自動、全体、都市、家族、事務、写真
2	24	労働、対策、報告、理解、問題、利用、事業、使用、事件、安全、特別、販売、自分、電話、以外、程度、重要、十分、自由、影響、機関、意見、普通、実施
1	9	会社、保険、施設、年度、大学、委員、理由、以下、一部

表 6 を見ると、5 標識とも結合できる漢語は「意味」の 1 語しかないことがわかった。ただし、「意味」と「ナ」と結合する用例は以下の 2 例のみである。

- (10) 夫婦のように生活してる…って事では同じ意味な気がしますけど？ (OC12_03949)
- (11) 成人といえ、法律的に責任能力を持った年齢の人、という意味な気がしますし… (OC09_15368)

これらは、いずれも「意味である気がする」を口語的に言いかえたもので、例外的な事例

と見るべきであろう。当初の予想では 5 標識すべてと結合する漢語が多いと考えていたが、実際には、そうした語はほとんど存在しないことが確認された。

次に、漢語上位 100 語に関して言えば、3 つの標識と結合できる漢語の数が 40% で最も多いことがわかった。これは、個々の語と結合する連体修飾標識の数の平均が 2.86 種（約 3 種）になることとも符合している。多くの漢語が 3 語程度の標識を許容するという事実は、それらの間での意味機能の解明の必要性を示していると言える。また、今回の調査により、個々の漢語は、優先的に結びつく標識を持っていることが示された。以下は、それらを整理した結果である。

表 7

各連体修飾パターンの頻度に基づく 100 語漢語のタイプ分け

タイプ	基準	語数	漢語
「ナ」型	「ナ」率 60%以上	7 語	可能, 必要, 安全, 特別, 重要, 十分, 自由
「ノ」型	「ノ」率 60%以上	69 語	意味, 関係, 情報, 生活, 研究, 活動, 結果, 状況, 世界, 管理, 自然, 教育, 人間, 目的, 機能, 指導, 存在, 消費, 生産, 内容, 方法, 部分, 時代, 対象, 制度, 女性, 以上, 地域, 学校, 環境, 企業, 調査, 現在, 地方, 状態, 個人, 労働, 評価, 国民, 商品, 期間, 全体, 対策, 都市, 家族, 事務, 報告, 写真, 問題, 会社, 事業, 事件, 販売, 自分, 電話, 以外, 程度, 影響, 機関, 意見, 普通, 保険, 施設, 年度, 大学, 委員, 理由, 以下, 一部
「シタ」型	「シタ」率 60%以上	6 語	発生, 参加, 対応, 利用, 使用, 実施
「的φ」型	「的」率 60%以上	0 語	
「的ナ」型	「的ナ」率 60%以上	4 語	基本, 代表, 効果, 国際
「ナ・ノ」型	どちらの標識の使用率も 60%未満であるが、ある 2 つ、あるいはある 3 つの標識の使用率を合わせて 80%を超える	1 語	健康
「ノ・シタ」型		4 語	説明, 確認, 開発, 理解
「ノ・的φ」型		4 語	社会, 文化, 経済, 技術
「ノ・的ナ」型		3 語	計画, 一般, 自動
「ノ・シタ・的ナ」型		1 語	決定
「ノ・的φ・的ナ」型		1 語	中心

表 7 を見るとわかることは 2 点がある。まず 1 点目は、1 つだけの連体修飾標識に偏る（「ナ」型、「ノ」型、「シタ」型、「的ナ」型のどちらかに属するもの）漢語は 86 語となり、すなわち、ほとんどの場合、漢語はどちらか 1 つの連体修飾標識を選好する傾向があるということである。2 点目は、1 つだけの連体修飾標識に偏るパターンのうち、「的φ」型に属する漢語は 1 語もないということである。すでに述べたように、「的φ」と接続できる漢語の数は多いが、それぞれの使用頻度が少なく、「臨時一語」として使用する場合が多いが、

「的φ」型に属する漢語は 1 語もないことは、この結論を支持したと言えるであろう。

以上、RQ1 では、重要漢語上位 100 語をサンプルとして、5 標識の許容度の相違、および、個々の漢語の相違について概観してきた。その結果、まず、5 標識の許容度の相違について、(1) 結合できる漢語の数は、「ノ」>「的φ」>「的ナ」>「シタ」>「ナ」という順序関係となること、(2) 5 種の標識の占有比は「ノ」>「シタ」>「的ナ」>「ナ」>「的φ」という順序になることが確認された。また、個々の漢語の相違について、(1) 平均して結合できる漢語の種類は 3 種程度となり、5 種すべてと結合できるのは「意味」の 1 語のみであること、(2) 各連体修飾パターンの頻度に基づいて漢語を分類すると、どちらか 1 つの連体修飾標識だけに偏る漢語は 86 語となり、すなわち、ほとんどの場合、漢語はある 1 つの連体修飾標識を選好する傾向があること、が確認された。

以下、外来語における 5 種の連体修飾標識の許容度はどのようにになっているかについて見ておこう。

4.2 RQ2 外来語における 5 種の連体修飾標識の許容度

ここでは、漢語と同じように、(1) 出現の有無と、(2) 頻度に基づく観察の 2 種に注目して外来語の分析を行っていく。前者に関して、外来語 100 種のうち、5 種の連体修飾標識ごとに結合しうる外来語の種類数を計測した結果、図 2 が得られた。

図 2

各連体修飾標識と接続できる外来語の数

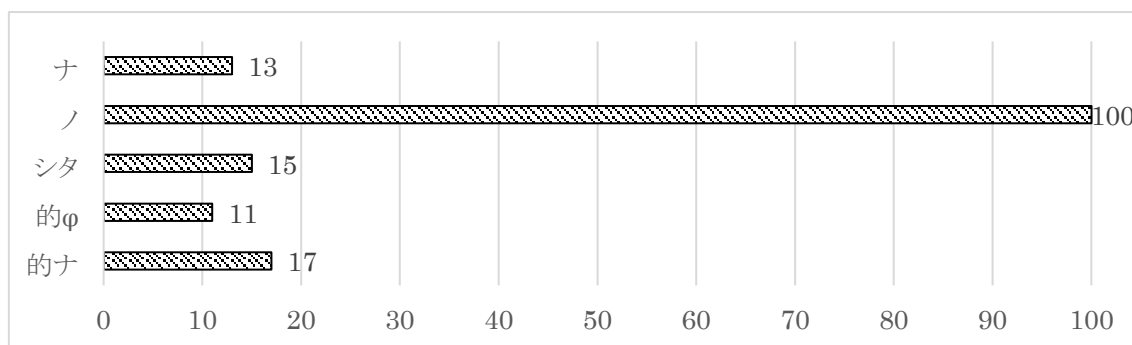


図 2 を見ると、5 つの標識のうち、「ノ」の許容度が一番高く、100 語の外来語のいずれとも接続できることがわかった。また、「ノ」以外の 4 つの連体修飾標識について、共起できる外来語の語数は 10 語程度であり、大きな差が認められなかった。すなわち、外来語の場合、「ノ」が高く許容される点は漢語と同じ傾向にあるが、その他の 4 標識に対する許容度は漢語より遥かに少ない。

続いて、同じく重要外来語上位 100 語に対して、5 標識の出現頻度を計算し、総頻度を 100 として、各標識の占有比を求めたところ、以下の結果を得た。

表 8

外来語と結合する場合の 5 種の連体修飾標識の占有比

外来語	ナ	ノ	シタ	的φ	的ナ
占有比 (平均)	1.21%	95.29%	3.09%	0.15%	0.26%

表 8 から、5 標識の占有比については、「ノ」>「シタ」>「ナ」>「的ナ」>「的φ」という順序になることが確認された。以下、4 点に絞って考察を行う。

1 点目は、5 標識の使用度に大きな差が存在することである。この点について漢語と同じ傾向にあるが、外来語においては 5 標識の差がさらに大きいことが確認された。

2 点目は、5 種の中で「ノ」が全体の 95% を占め、圧倒的に多いことである。すでに述べたように、漢語と他の名詞の結合においては「ノ」が 7 割を占め、典型的な標準形であるが、外来語の場合、その比率がさらに大きくなり、ほとんど「ノ」が使用されると言える。

3 点目は、文法的な性質は他の形と異なる「シタ」の占有比は「ノ」に続いて 2 番目となることである。この点について言えば、漢語と同じく、非和語系語彙と名詞の結合という表現形式において「シタ」は重要な位置を占めていることが示唆された。

4 点目は、「的φ」と「的ナ」の使用率はそれぞれ 0.15% と 0.26% となり、外来語は「的」とほとんど共起しないということである。漢語の場合、「ノ」を除くと、「シタ」を含む残りの 4 形の頻度が拮抗していたことが確認されたが、外来語の場合、「ナ」と「シタ」の 2 形の頻度が拮抗しているが、「的φ」と「的ナ」の使用は非常に少なく。

以上、出現の有無および頻度という 2 つの観点から、外来語の名詞接続の全体傾向について確認してきた。では、個々の語ごとにどのような差が存在するのであろうか。上位 100 語に対して個別に調査したところ、以下の表が得られた(ここも上位 10 語を例として示す)。

表 9

重要外来語上位 10 語の 5 標識の選択許容度

	外来語	ナ	ノ	シタ	的φ	的ナ	許容度
1	テレビ	0.00% ×	99.93% ○	0.00% ×	0.00% ×	0.07% ×	1
2	サービス	0.00% ×	99.65% ○	0.00% ×	0.17% ○	0.17% ○	3
3	センター	0.00% ×	98.68% ○	0.00% ×	1.32% ○	0.00% ×	2
4	ホーム	0.00% ×	100.00% ○	0.00% ×	0.00% ×	0.00% ×	1
5	スポーツ	0.00% ×	97.36% ○	0.00% ×	0.66% ○	1.98% ○	3
6	データ	0.10% ×	99.80% ○	0.00% ×	0.00% ×	0.10% ×	1
7	グループ	0.00% ×	100.00% ○	0.00% ×	0.00% ×	0.00% ×	1
8	システム	0.10% ×	98.82% ○	0.00% ×	0.59% ○	0.49% ○	3
9	メール	0.00% ×	97.42% ○	2.58% ○	0.00% ×	0.00% ×	2
10	バス	0.00% ×	100.00% ○	0.00% ×	0.00% ×	0.00% ×	1

上記の許容度に基づき整理を行ったところ、以下の表 10 が得られた。

表 10

個々の外来語と接続できる標識の数

標識数	語数	外来語
5	0	
4	4	デザイン, ゲーム, ソフト
3	12	イメージ, システム, プラス, デジタル, ボランティア, サービス, スポーツ, モデル, テーマ, プロ, オープン
2	30	イベント, テスト, タイプ, セット, マーク, コスト, メディア, ファン, センター, メール, チェック, ライン, メーカー, プログラム, スタート, スーパー, ファイル, フリー, メニュー, コンピューター, ビジネス, スタイル, マン, プレー, ファックス
1	54	データ, レベル, コース, ガラス, スペース, サッカー, プラン, テレビ, チーム, ホテル, パソコン, クラブ, エネルギー, カメラ, パン, タバコ, ニュース, ルール, ネットワーク, トイレ, マンション, ビール, ラジオ, カー, コーヒー, カップ, メッセージ, ストレス, グリーン, ホーム, グループ, バス, カード, ケース, バランス, ボール, インターネット, クラス, ネット, ビル, タイム, トップ, ガス, ビデオ, メンバー, ドア, シート, サイト, ベース, カラー, キー, テーブル, ベッド, ボタン, エンジン, コーナー, スタッフ, ゴルフ, ホール, スピード, バック

表 10 を見ると、上位 100 語のうち、5 標識とも結合できる外来語は存在しておらず、また、半分以上の外来語は 1 つの標識としか結合できないことが確認された。実際に、個々の外来語と結合できる連体修飾標識の数の平均を計算したところ、1.56 という値が得られた。漢語と比べて、外来語は各標識に対する許容度は 45.45% 少ないことがわかった。

また、今回の調査により、個々の外来語は、優先的に結びつく標識を持っていることが示された。以下は、それらを整理した結果である。

表 11

各連体修飾パターンの頻度に基づく 100 語外来語のタイプ分け

タイプ	基準	語数	漢語
「ノ」型	「ノ」率 60%以上	98 語	デザイン, ゲーム, イメージ...
「シタ」型	「シタ」率 60%以上	1 語	スタート
「ナ」・「シタ」型	どちらの標識の使用率も 60%未満であるが、ある 2 つの標識の使用率を合わせて 80%を超える	1 語	オープン

表 11 を見ると、100 語のうち 98 語は「ノ」型であり、ほとんどの外来語は「ノ」を選好することが確認された。その他、「シタ」型と「ナ・シタ」型はそれぞれ 1 語存在すること

も確認された。すでに述べたように、漢語の場合も「ノ」型に属するものが多いが、「ナ」型や「シタ」型、そして「的ナ」型など他のタイプもバラエティー豊かに存在している。それに対して、外来語の場合「ノ」型は 98%となり、他のタイプはほとんどない。

以上、RQ2 では、重要外来語上位 100 語をサンプルとした場合、5 標識の許容度の相違、および、個々の外来語の相違について概観してきた。その結果、まず、5 標識の許容度の相違について、(1) 結合できる外来語の数については、「ノ」が一番多く、それ以外の 4 標識と結合できる外来語の語数には大きな差がないこと、(2) 5 種の標識の占有比については、「ノ」>「シタ」>「ナ」>「的ナ」>「的φ」という順序となることが確認された。また、個々の外来語の相違について、(1) 個々の語と結合する連体修飾標識の数について、5 標識とも結合できる外来語が存在しておらず、また、半分以上の外来語は 1 つの標識としか結合できないこと、(2) 各連体修飾パターンの頻度に基づいて外来語を分類すると、100 語のうち 98 語は「ノ」型であることが確認された。

5. まとめ

以上、本研究では、非和語系語彙に後続する「ナ」・「ノ」・「シタ」・「的φ」・「的ナ」という 5 つの連体修飾標識の許容度がどのように異なるかについて調査を行った。

RQ1 (漢語における 5 種の連体修飾標識の許容度) では、(1) 結合しうる漢語の種類数においても頻度占有比においても「ノ」が最も典型的な連体修飾標識であること、(2) 漢語は平均して 3 種程度の標識を許容すること、(3) ほとんどの漢語はある 1 つの連体修飾標識を選好する傾向があることが確認された。また、RQ2 (外来語における 5 種の連体修飾標識の許容度) では、(1) 漢語と同じように、結合しうる漢語の種類数においても頻度占有比においても「ノ」が最も典型的な連体修飾標識であること、(2) 半分以上の外来語は 1 つの標識としか結合できないこと、(3) 各連体修飾パターンの頻度に基づいて分類すると、ほとんどの外来語は「ノ」型であることが確認された。

ただし、本章はまだ以下のような課題が残されている。1 点目は、すべての連体修飾標識を対象としていないことである。本研究はよく議論された「ナ」・「ノ」・「的φ」・「的ナ」に「シタ」を加えて範囲を広げたが、分析の限界として「名詞+名詞」や「シテイル」など他の接続がまだ見られていない。今後はこれらも加えて議論をする必要があると考えられる。2 点目は、異なる連体修飾標識を用いることで、その意味機能にどのような影響が生じるについての分析には至らなかったことである。この点については今後の継続研究において対応を図っていきたい。

引用文献

井上道雄 (2004) . 「カタカナ語 (外来語) 基本語彙 550 語 : その語彙特性と選定基準」『神戸山手大学紀要』 6, 65-79.

- 王娟 (2008) . 「『的』付きナ形容詞の統語機能に関して」『ニダバ』 37,125-134.
- 荻野網男 (2006) . 「形容動詞連体形における『な/の』選択について—田野村氏の結果を WWW で調べる—」『計量国語学』 25(7) ,309-317.
- 郭奂君 (2012) . 「現代日本語におけるカタカナ語使用状況の計量的研究」神戸大学修士論文.
- 呉人恵・趙虹 (2008) . 「日本語の接尾辞『一的』の意味論および統語論的一考察」『富山大学人文学部紀要』 49,19-43.
- 国立国語研究所 (1984) . 『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版.
- 田野村忠温 (2002) . 「形容動詞連体形における『な/の』選択の一要因—『有名な』と『無名の』—」『計量国語学』 23(4) ,207-213.
- 鄧琪 (2019) . 「コーパスに基づく外来語形状詞の後続要素『ナ』・『ノ』についての調査」『電子情報通信学会技術研究報告』 119(114),25-30.
- 豊田豊子 (1980) . 「漢字構成の『な形容詞』(形容動詞)」『日本語学校論集』 7,85-99.
- 原田朋子 (2016) . 「接尾辞『的』の連体修飾用法『一的 ϕ 』と『一的な』に関する一考察」『同志社大学日本語・日本文化研究』 14,1-27.
- 間淵洋子 (2017) . 「近代雑誌コーパスにおける漢語語彙の特徴：BCCWJ との比較から」『国立国語研究所論集』 13,143-166.
- 羅蓮萍 (2009) . 「『ナ形容詞』と『ノ形容詞』のイメージ—日本語母語話者の使用意識—」『山口国文』 32,120-110.
- 李在鎬 (2013) . 「形状詞『ナ』共起と『ノ』共起のコーパス基盤調査」『計量国語学』 29(3) ,77-95.
- 李楓 (2011) . 「漢語サ変動詞の卓立性の再考：動詞形・構文形比率を手掛かりとして」『第 6 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』(国立国語研究所) 63-72.

